

# SUNDAY NIKKEI

## 経済論壇がる



東京大学教授 福田 慎一

昨年来、世界経済は「百年に一度」といわれた金融市場の混乱や大不況から漸く回復しつつある。ヨーロッパ問題に惹かれて世界の危機だ、依然として様々な不安定要素は残るもの、最悪期からほんの少しのが一般的な認識である。しかし、危機後の世界経済が從来の構造パラダイム（基本的な構成）から転換し、持続的な経済成長が達成しづらいための道筋は、いまだに不透明である。

□ □

海外メディアでは、「アベノミクス」（Time to rebalance）や題から特集記事を組み、危機後の米国経済が直面するラスチックな構造変化を論じている。

危機の前夜、米国では経営収支の赤字が大幅に拡大し、新興国や産油国などの海外からの資金流入と対外債務が回復に影響上げていた。しかし、危機後は機関投資家、追跡者、追加税額は急激に減少している。

その一方、危機からこれまで回復した新興国の輸出は世界貿易量に占めるシェアがますます高まっている。いまや世界の「産業供給地」、世界の「製造業は米国向むき日」、極東半島から新興国にまでされた「輸出型」ぐるシフトといふ現象が、



寺島実郎氏



橋川武郎氏



伊藤謙敏氏



ホリオカ力氏

## 危機後のパラダイム転換の行方

### 世界経済は“多極型”だと

私はどうして多極化の論調についている。

□ □

私がなぜか多極化の問題についているのかは、確かに多極化がアベノミクスによるものである。即ち、財政赤字の削減策（内需型政策・サービス業）も海外展開の削減により財政赤字の緩和が可能となる。しかし、小国にとっても、新興国は確かに多極化の構造変化によって、多極化へパラダイムに乗り換えないための政策対応が必要となる。

□ □

日本経済は1990年代初頭

にわざわざ

日本経済は1990年代初頭

にわざわざ